

当報告の内容は著者の著作物です。

文法研究ワークショップ（第4回）～そこに「ゼロ」はあるのか？(2)

開催日時：平成24年7月21日（土曜日）午後1時00分～午後5時

開催場所：AA 研研修室（405室）

報告1

報告者名：吉岡乾（東京外国語大学大学院リサーチフェロー）

報告タイトル：ブルシャスキー語でゼロ形態素を立てる

報告2

報告者名：大西秀幸（東京外国語大学大学院）

報告タイトル：ジンポー語の動詞文標識の屈折に想定されるゼロ形式

報告3

報告者名：佐々木充文（東京大学大学院）

報告タイトル：そこに null はあるのか—古典ナワトル語からみた“null anaphora”

報告4

報告者名：梅谷博之（東京大学人文社会系研究科研究員）

報告タイトル：モンゴル語ハルハ方言におけるゼロ

コーディネーター：大島一（AA 研研究機関研究員）、児島康宏（AA 研特任研究員）

ワークショップ概要：

本ワークショップは、記述言語学を志す学生や研究者が最新の研究成果や調査データを紹介しあうことにより、学生・研究者の交流や最新の情報の共有を促進することを目指すものである。3月末に行なわれた前回のワークショップに続き、言語の分析における「ゼロ」の扱いをテーマとして、4名の報告者が研究発表をおこなった。

会場への出席者は14名。これまでと同様に、ワークショップはUstreamを通じてインターネット上で放送した。それを利用して遠隔地からも2名の参加者があった。それぞれの報告について活発な質疑応答があった。

タイプの大きく異なる4つの言語、ブルシャスキー語、ジンポー語、古典ナワトル語、モンゴル語ハルハ方言において、いかなる場合にゼロ形態を設定する必要があるのか、あるいは、ゼロ形態の設定が不要であるかについて、4名の発表者がそれぞれの分析を提示した。

モンゴル語を除く3つの言語では、動詞が主語の人称・数を示す接辞をとるが、一部の人称・数で有形の接辞が現れない。これについては、いずれの言語の分析でも、体系の一

貫性を重視する立場からゼロ接辞の存在が主張された。あわせて、ジンポー語については項の焦点化、古典ナワトルについては項の定性が論じられた。ブルシャスキー語では接辞の順序が問題とされた。

その一方で、とくに古典ナワトル語とモンゴル語に関して、名詞につくゼロ接辞の設定に対する懐疑的な見方が示された。古典ナワトル語では動詞の主語人称接辞と同じものが述定文の補語にもつき、さらに、人称接辞のついた名詞が項名詞としても用いられる。これについて、すべての名詞が潜在的に節の構造を持つとする分析すると、きわめて複雑な統語的分析が要求されることが議論された。

また、モンゴル語ハルハ方言で名詞が並列された場合に格接尾辞が省略されることについて、それぞれの格接尾辞にゼロの異形態があると考えた場合、主格の分析において起こりうる問題が検討された。「異形態」をどう考えるかについて、参加者からも多くの意見が出された。

報告書作成：児島康宏（AA 研特任研究員）

報告要旨

報告 1：「ブルシャスキー語でゼロ形態素を立てる」（吉岡乾、東京外国語大学大学院リサーチフェロー）

本発表では、ブルシャスキー語の文法記述をする際にどのようにしてゼロ形態素を立て、或いは立てなかったかを具体的に紹介した。実際にゼロ形態素を立てた要素としては、動詞の希求法主語人称接尾辞の一部、現在法接尾辞、並びに名詞の絶対格接尾辞である。片や、未完了アスペクト接辞の付いた語幹に対立する（裸の）語幹や、修飾／複合要素として用いられている（裸の）名詞類には、ゼロ形態素が付いているとは考えないことを具体例を挙げて説明した。

報告 2：「ジンポー語の動詞文標識の屈折に想定されるゼロ形式」（大西秀幸、東京外国語大学大学院）

ジンポー語の動詞文標識にはアスペクト、数、人称を示す形式が選択され、付加されることが先行研究で指摘されている。これは個々の文法カテゴリーの標識で埋められるスロットを順に並べた形で記述が可能である。そのうち最も明瞭にゼロ記号を想定できるのは人称のスロットである。しかし、先行研究の問題点として、どの人称接辞も選択されないケースについて十分な言及がなされていない点あげられる。発表者は先行研究の問題点に対して答えを提示し、上記で認定したゼロと絡めながら、この言語の動詞文標識の記述方法について論じた。

報告 3：「そこに null はあるのか—古典ナワトル語からみた “null anaphora”」（佐々木充文、東京大学大学院）

本発表では、メソアメリカの古典ナワトル語の形態統語論におけるゼロをめぐる問題として、(i) 動詞文にみられる項の省略、(ii) 名詞文にみられる主語人称標示、の2点について報告を行った。古典ナワトル語の項名詞句の脱落は、スペイン語やイタリア語にみられる主語代名詞の省略と様々な点で似ているが、スペイン語やイタリア語についてしばしば行われてきたように項位置にゼロ代名詞を立てる分析をとると、分析がきわめて煩雑になってしまう。また、古典ナワトル語では名詞にも動詞と同様に主語人称の標示が義務的に起こると考えられるが、全ての名詞に動詞と同様の項構造を認めてしまうと、一貫性のために多くのゼロ要素を立てなければならず、直観に大きく反した分析をせざるをえない。これらの現象を記述するうえで避けられない直観と一貫性のジレンマは、意味的側面と形式的側面をあわせもつ人称標示の両面性を反映している。

報告4：「モンゴル語ハルハ方言におけるゼロ」（梅谷博之、東京大学人文社会系研究科研究員）

モンゴル語ハルハ方言に関して、先行研究で設定されているゼロ形態（素）には、主に次の5つがある。(1) 名詞の主格接辞、(2) 動詞の終止形を作る接辞の1つである命令を表す終止語尾、(3) 語根から語幹を形成する接辞、(4) 直接目的語が不定・非指示的である場合の対格接辞、(5) 名詞が並置された場合に最後以外の名詞につく格接辞。本発表ではまず、これら5種類の「ゼロ形態素」や「ゼロ形態」を概観した。その後、特に(5)の事例を取り上げ、先行研究に従って(5)の「ゼロ形態」を仮に認めた場合に、どのような問題が生じるかを検討した。